

渋沢栄一の「論語と算盤」から学ぶ 証券市場のグローバル化と証券取引所のルーツ

澁澤 健(シブサワ・アンド・カンパニー)

リーマン・ショックの弊害により、資本主義のあり方について疑問が世間で急増し、現在でも「21世紀型資本主義」のあり方について議論されている。しかし、我が国の資本主義の起源は、渋沢栄一が創設した日本初の銀行の第一国立銀行の株主募集布告で示されている。「銀行は大きな河のようなものだ。銀行に集まってこない金は、溝に溜まっている水やポタポタ垂れている滴と変わらない。＜中略＞折角人を利し国を富ませる能力があっても、その効果はあらわれない。」これは、『合本主義』という同じ目線を共有している小資本が寄せ集まって大資本となる経済思想であり、国家繁栄には不可欠な構造改革であると栄一は考えた。

また、渋沢栄一が説いた「論語と算盤」は「道徳的資本主義」と訳されることが多いが、これは決して「やさしい資本主義」ではない。自立心という責任を高く掲げる「きびしい資本主義」だ。レバレッジなどを活かした算盤の計算が長けていれば、自分の懐は一時的に暖まるかもしれないが、それだけに頼ってしまうと、自身の幸福が継続されないかもしれない。一方、自分は論語読みで「お金儲けなど卑しい」と批判しても、何事も始まらない。道徳（論語）と経済（道徳）が車の両輪になることは、幸福の持続性を支えるイノベーションなのであり、いまのグローバル時代でも充分に通用する渋沢栄一の教えだ。